

円頓寺説話の編集と研究

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 阪井芳貴

2019年度から開始したプロジェクト研究「円頓寺説話の編集と研究」は、名古屋市西区円頓寺界隈で語られてきた市井の民間伝承を収集・保存し今後の研究に資するため、実際の住民の語りを文字化し編纂することを目指している。これは、名古屋市の中心部における都市化および都市空洞化により戦前から住民が減る一方、新たな街づくりが進む那古野円頓寺地区で、名古屋弁による地域の民間伝承が消えていく現実に向き合い、戦前戦後の貴重な伝承を後世に伝えるべく、その基礎的な作業と研究をおこなうものである。

方言研究を専門とする椎名渉子と説話文学研究が専門の土屋有里子に、民間伝承研究に携わる阪井芳貴とESD研究の曾我幸代が連携し、新たに名古屋の古典籍に造詣の深い滝澤みかを加え、名古屋という都市の中の地域共同体の持続可能性の考究を進めつつある。

2019年度は、円頓寺商店街に店を構えて128年になる呉服店「尾嶋屋」の社長伴野丘一氏による那古野円頓寺の今昔語りを、椎名ゼミの学生を中心に聞き取り・記録し文字化する作業をおこなった。2020年度は、伴野氏への聞き取り調査を継続し、円頓寺商店街のこれまでをふり返り、商店街のこれからのあり方について聞いた。その語りをもとに、曾我幸代がまちづくりにみる教育的意義について考察を行った。その成果は、ほとんど未開拓の名古屋における民間伝承研究の深化につながると期待している。

円頓寺商店街：「雑多」のなかにあるインフォーマルな学び

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 曾我幸代

1. はじめに

コンビニやスーパー、インターネットでの買い物が日常となっている今、商店街の意義とは何だろう。とくに何も言葉を交わすことなく、陳列や提示された多種多様な商品のなかから個々人がそれぞれの趣味嗜好に合わせて購入する、という消費行動に違和感はない。しかし、幼い頃、親に連れられていった商店街での買い物はいつも人と人とのやりとりのなかにあった。

昨年に引き続き、円頓寺商店街内にある「尾嶋屋」の伴野氏に聞き取り調査を依頼した。本稿では、

彼との対話からみえたこれまでの円頓寺商店街の姿を概観し、商店街の意義について検討する。なお、伴野氏との対話は名古屋方言を用いて行ったため、文中内の引用は名古屋方言のままの表記としている。

以下は、その調査概要である。

(1) 調査目的と調査方法

調査目的は、円頓寺商店街のこれまで、および復興過程をふり返りながら、円頓寺商店街の特徴と課題を捉えることである。調査協力者は、円頓寺商店街内に店をもつ呉服店「尾嶋屋」の社長伴野丘一氏である。伴野氏から見た円頓寺商店街はどのように映っていたのか、また映っているのかを彼のライフヒストリーをふり返りながら捉える。そのため、半構造化面接法をとり、適宜話の文脈にあわせて質問を増減する。

主な質問項目は、次のとおりである。

- ・ 伴野氏と円頓寺商店街
- ・ 円頓寺商店街の復興期
- ・ 円頓寺商店街のこれから

(2) 日時と場所および調査参加者

- ・ 2020 年度第 1 回調査（語り手：伴野丘一、聴き手：椎名渉子・曾我幸代）
2020 年 10 月 16 日（金）午後 7 時から 8 時半 於：円頓寺商店街
- ・ 2020 年度第 2 回調査（語り手：伴野丘一、聴き手：椎名渉子・曾我幸代）
2020 年 10 月 30 日（金）午後 7 時から 9 時 於：円頓寺商店街

2. 語りにみる円頓寺商店街の姿

伴野氏との対話から、昭和 30 年代、1950 年代の円頓寺商店街の姿が捉えられる。

子どもの頃っていうのは、向かいが駐車場なんですけど、それがパチンコ屋だったんですよ。さらに映画館もあり、いろんな遊び場が釣り堀もあり。まあ、だけど大人の遊び場だよ、みんなね。子どもが遊べるのはおもちゃ屋さんぐらいなもので。だけど商店の子はみんな店を 9 時とか 10 時までやとるんで、ほったらかしなわけですよ。だから好きなように遊んどっていいわけで、遊び場っていえばお寺が一番多かったかな、向かいも含めた。お寺があるんであちこち遊べる。で、要するに夜 9 時とか 10 時っていうのは混むわけだよ。人が混ぶるもんで。遅くなるので一緒に家族という感じはほぼないと。月に 1 回ぐらい。そんな忙しい商店街だった時代が 60 年代いっぱいまでぐらいかな。

当時の子どもたちは、親との会話の記憶よりもお小遣いをもらって、近所の文房具屋で駄菓子や

チョコを買って、道路や寺などで遊んでいた、つまり「ほったらかされた」記憶のほうが強いという。それだけ、商店街が繁盛していたことがうかがえる。また、現在の円頓寺商店街にはない「釣り堀」や「映画館」「パチンコ屋」などの「いろんな遊び場」があったことが上の語りからもわかる。

活気のあった商店街も1960年代後半頃から徐々に傾きかけていく。名古屋駅に地下街やデパートの建設が始まり、客数が減り始め、1980年代には、「釣り堀」や「映画館」などの遊び場もなくなり、商店街の店のシャッターが下り始めていった。その後、伴野氏は進学のため、名古屋を離れた。名古屋に戻ってからは柴に構えたサテライト店での商いに従事していたため、商店街の復興当初の動きには直接かかわっていなかった。サテライト店を閉めて円頓寺の店に従事するようになって、復興の流れに乗るようになる。昨今の状況をふり返り、以前との違いを次のように語った。

違った街になってきたなっていう感じが。それをどう思うかっていうと楽しくていいと思いますけど、でも褒めてもらえば褒めてもらうほど「いや、実は円頓寺ってそういうとこじゃないんだよ」って言いたくなるっていう変な感じ。だから今は今でいいし、うちもそこに乗っているんことはできるし役割はあると思うけれど、もはやもうなくなってしまった面白い店は帰ってこないなと。

昔とは違うが、新たな姿を見せ始めている円頓寺商店街には、「那古野下町衆」のように、コンサルタントや大学研究室、建築家、企業、クリエイターなど、円頓寺周辺の地域を愛するさまざまなメンバーが集まり、まちづくりにかかわっている。「よそ者」と呼ばれる人が商店街の店主の声を聴き、かかわりをつくりながら、新たな場をつくる。「コツコツ」「きちっとやる」ことをしていくことで、円頓寺商店街に人が戻ってきた。

きれいごとじゃなくて、みんなそれぞれに力があるところがあって共感できるんで、そんなに細かい人間性、どうかも分からんし、深い話じゃないにしても、みんな誰一人としていろいろしゃべれる。こいつはこれがすごいよっていうのが。それで十分かなと。今のところは円頓寺はそうやっていて、本当にやる気の人が揃ってる。

多様な人がかかわり、交じり合うきっかけがあったことを伴野氏の言葉から聞き取れた。今では多くの人が参加する秋のイベント「パリ祭」はその一つであった。「よそ者」がつくる仕掛けにそれぞれの店が特異性を出し「のっかる」ことで商店街に色が戻ってくる。イベントが円頓寺商店街の風物詩となり、この地域の独自の文化となっていくことが期されている。

3. 「雑多」のなかにあるインフォーマルな学び

伴野氏との対話のなかで興味深かったのは、これからの商店街のあり方を話しているときで

あった。「よそ者」といわれる人たちの活躍をふり返りながら、これからもそうした人が入ってくることを期待するかという質問に、「そうですね、アミューズ」と答えた。「アミューズ」、つまり「楽しみ」である。「もし釣り堀にしてもビリヤード場にしても、昔あったところからもしかしてできるだけでも、結構今面白いと思う」と伴野氏は話した。この言葉から想像できる未来像には、人との姿が見える。店が軒を連ねる商店街の絵に加え、伴野氏が子どもの頃にみた商店街のように、さまざまな店が独自の色を放ちながらも、大人や子どもが集い、幾重にも行き交い、それぞれの暮らしが感じられる「雑多な」姿があるように思われた。

多様性という言葉を私たちはよく見聞きする。多文化共生社会においては、それが尊重されることが前提にある。その内実を丁寧に紐解いてみると、それは「雑多」である、またそうしたあり様が保障されていることを示唆しているのではないだろうか。それぞれの特異性が表出された「モザイク」や「パッチワーク」のように、一つひとつの個性がしっかりと生きていながら、全体としても調和した様である。そうした「雑多」のなかで生きる私たちもまた、そこから個々人のあり様をインフォーマルに学び取る。

子どもや若者世代と大人世代がすみ分けられいている現代社会において、異世代間に生じるミスコミュニケーションによって起こる不和や対立がある。互いを知らないからこそ起きる問題の根は、多文化共生につながっているともいえる。また、それは文化の継承にも通じる問題でもある。方言をはじめとする言葉、郷土料理にみる食文化などの無形文化の多様性が失われてきたことは国際社会でも問題視されている。文化を継承する場として、学校等でのフォーマルな学びの場をつくることも必要であるが、こうした「雑多」をまちづくりに取り入れること、異世代間のコミュニケーションを促す仕掛けをつくっていくことが求められていると筆者は伴野氏との対話から感じた。すみ分けられた場をつなぐために、「いろんな遊び場」をつくることで創発されるコミュニケーションが一人ひとりをつないでいこう。

4. おわりに

長時間にわたる調査に協力してくださった伴野氏には感謝を申し上げたい。筆者自身が、伴野氏との対話を通して、コミュニケーションの楽しさを感じさせられたとともに、まちづくりのなかに見える教育的意義を考えさせられた。始終笑いが絶えない対話で、意味充実した時間を共有していただき、本当にありがとうございました。「しゃべっとかんとなくなる(しゃべっておかないとなくなる)」と話す伴野氏の言葉からも、話すことで残せる姿があることに改めて気づかされた調査であった。

なお、本稿は紙幅に限りがあったため、詳細の記述を割愛したが、本稿がもとにしている調査データおよびその考察については、2020年度の調査報告書に反映する予定である。

参考 URL

・那古野下町衆 <http://nagosyu.net/about> (2021年1月20日)